恋愛

 Puney　Loran　Seapon

「つまんねーな」

　映画館で、はそう呟く。社会人になり立ての彼が見ているのは今話題の、主人公の男の子と幼馴染の女の子が、紆余曲折を経て結ばれるというストーリーの恋愛映画だ。感動のラストシーンに差し掛かった時の、勇気のそんな発言に、周りで見ていた人、特に勇気の隣で座っていた勇気と同じくらいの年の女性が勇気を睨む。この女性は、まゆみ。勇気の幼馴染だ。

「……」

「……？」

　無言でまゆみに睨まれ、勇気はキョトンとする。そんな勇気の反応に呆れたのか、まゆみは溜息をついた。

「お……面白かったね」

日がそろそろ落ちる頃、映画を見終わって、映画館から出た時、まゆみが勇気にそう言った。まゆみの方が勇気よりも頭半個分低く、まゆみは勇気の顔を少し見上げる。そんな彼女の発言に、勇気は首を傾げる。

「そうだったか？　あんなの、ただ単に自分と同じように冴えない男が、リア充になっていく様を見るだけの映画だっただろ」

「そ……そんなことないよ。特にラストのシーンなんか、すごくよかったと思わない？」

「ん？　あぁ、喧嘩別れしたあとの、主人公の男が女の唇を強引に奪うシーンか？　あれはリアリティーがねーな。普通、喧嘩した相手に許してもらいたければ、土下座で平謝りが一番じゃね？」

「ゆ……勇気、もう少しあんたはロマンチックな展開を……映画なんだし」

　だんだん心が折れかかってきていたが、まゆみは何とか勇気に恋愛映画の良さを知ってもらおうと、そう言った。だが、

「そこなんだよな。恋愛映画だからって、最後は必ず二人が結ばれるってのが気に入らん。いっそ皆別れてしまえばいいのに」

　というセリフに、まゆみの心は完全に折れた。

「……はぁ」

「ん？」

　溜息をついたまゆみに、勇気は再び首を傾げる。どうやら、彼は会話の地雷を踏んでしまったことに気づいていないようだ。

「と……ところで勇気」

　気を取り直し、まゆみは勇気に可能な限りの笑顔を向け、話しかける。なにせ、今日は特別な日なのだ。まゆみとしては、今日は勇気とできるだけいい雰囲気になるように過ごし、なんとしてでも勇気から『あの言葉』を言わせたかった。

「お腹空かない？」

だが、まゆみが頑張って言ったこのセリフも、勇気には通用しない。

「……そうか？」

「わ……私はちょっとお腹すいたかな。勇気、なんか奢って」

「そんな金ねーよ。つーか俺、もう帰るわ」

　勇気のそのセリフに、まゆみは衝撃を受けたような表情をする。まだ夜は始まったばかりなのだ。しかし、勇気は彼女の気持ちに気づいてはいないようだった。

「……え、ちょ……ちょっと、まだ八時にもなってないじゃん！　それに、明日は休日だし！　もう少し一緒に」

「俺は休日でも早寝早起きする、健康的な毎日を送る男なんだよ。今から帰らないと、十時までに布団に入れないだろうが」

「で……でも、少しくらいの夜更しなら」

「分かってないな。その『少し位』が生活の乱れを……」

　まゆみは必死になって勇気を引き止めようとする。だが、彼女の必死の抵抗も虚しく、勇気は『健康的な生活』について、得意げに話し始めた。

「……というわけで、まゆみももう少し健康的な毎日を送らないと、そのうち後悔するぜ？　気をつけろよ」

　そう言い終わって、満足したように勇気は自宅へと向かおうとする。

「ゆ……勇気！」

　そんな勇気をみて、まゆみは慌てて勇気の服の袖を掴んで引き止める。

「ちょっとあんた、今日が何の日か分かってる？」

　少し強引だったが、まゆみはこんな方法で勇気に今日が何の日か、を思い出させようとする。幼馴染なのだから、流石にこれで分かるだろう、と思ったまゆみの耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「ん？　なんかあったっけ……って、どうした？」

　まゆみはわなわなと肩をふるわせていた。そんなまゆみに何かあったのかと勇気が顔を覗き込んだ瞬間だった。突然、風船が破裂したかと思うような音がしたと同時に、勇気の視界がぶれる。気づけば、勇気はあさっての方向を向いていた。大きな音だったのか、周りにいた人が、何事かと二人を見ている。どうやら、勇気はまゆみに顔を思いっきりひっぱたかれたようだ。

「勇気のバーカ！」

　勇気が今の行動について抗議する暇も与えず、まゆみはなぜか少し涙目で勇気に向かってそう叫んだ。そして、呆然と立ち尽くす勇気をその場に残し、まゆみは早足で何処かへ立ち去ってしまった。気のせいか、涙が見えたような気がした。

「……ただいま」

　ここは勇気の家。あれから映画館付近を探し回ったが、結局まゆみは見つからなかった。勇気の家の隣はまゆみの家だが、明かりがついていないところをみると、どうやら家にも帰っていないらしい。

「あれ、おかえり勇気。思ったより早かったね」

　居間から、勇気の姉、が顔を覗かせた。少し驚いたような表情をしている。

「ただいま。姉さん、どうしたの？」

　そんな絵里の様子に、勇気は首を傾げる。勇気としては、まゆみを探していたので、予定していた時間より、大夫遅くなってしまった感じがする。なぜ「思ったより早かった」なのだろうか。

「……？　今日は帰ってこないと思ったのに」

　首を傾げた勇気に、絵里も同じように首を傾げた。

「そんな訳あるかって。ただ映画見に行っただけだぜ？」

「……えっと、勇気、今日何の日か覚えてる？」

　絵里は訝しげな目つきで勇気を見る。そんな絵里に対し、勇気は再び首を傾げた。

「姉さんまで……。教えてくれ、今日は何の日だ？」

「……まさか、覚えてないの？」

　呆れたような声でそう言われても、勇気には何のことか、さっぱり分からない。

「な……なんかあったっけ？」

「……自分で考えなさい」

　なぜか不機嫌になった姉は、そう言って居間へと姿を消した。

「あれ、おにぃちゃん、もう帰ってきたの？」

　今度は階段の方から、驚いたような声が聞こえた。妹のだ。

「凛……だから、『おにぃちゃん』って呼ぶなって」

　小学校高学年にもなって、ちゃんと『お兄ちゃん』と呼べるはずなのだが、凛は勇気のことを『おにぃちゃん』と呼ぶ。まぁ、勇気もあまり強く言わない。もう何回も注意しているが、治らないからだ。とはいえ、勇気はこのまま許容するつもりもないが。

　だが、今はそんなことを言っている場合ではない。凛も絵里と似たようなことを言う。

「凛、今日って、何かあったっけ？」

　こいつなら何か知っているかと思った勇気は、凛に尋ねる。だが、そんな勇気の発言に、凛は目を丸くする。

「えっ……おにぃちゃん、今日って」

「ダメよ、凛」

もう少しで今日がなんの日か分かりそうなところで、居間から再び顔を出した絵里が邪魔をする。

「勇気、自分で考えなさい。そして、ちゃんと謝りなさい」

「俺、何か悪いことした？」

　だが、絵里は勇気の質問には答えず、居間に戻ってしまった。

「ごめんね、おにぃちゃん。でも、おにぃちゃんが悪いんだよ？」

絵里の今の発言に納得したのか、普段は今にも甘えてくるような目をしている凛が、呆れたような目に変えてそう言った。

「ちょ、凛！　教えろよ！」

無情にも部屋へと戻ろうとする凛に、近所迷惑も気にせずに勇気は叫ぶ。だが、凛は答えてくれなかった。

「……ったく、何なんだ？」

　誰もいなくなった廊下で、勇気はそう呟いた。

「まゆみちゃん、ごめんね」

　次の日の朝、まゆみが木村家に朝食を作りに来た時だった。まゆみが家の中に入った瞬間、まだパジャマ姿で眠そうな顔をした絵里が、目を擦りながら謝ってきた。

「何のことですか？」

　まゆみが (本人には直接言えないが)ぐーたらで家事を一切やらない絵里の代わりに、朝食を作ったり掃除をするために勇気の家に来るのは、いつものことだ。まゆみには、謝られた理由が分からなかった。

「いや、昨日の勇気のこと。あいつ、忘れていたんだって？」

　絵里の発言に、まゆみの顔がとたんに不機嫌になる。

「ごめんなさい、絵里さん。今は、あの馬鹿の顔を思い出したくないんです！」

　頬を膨らませて、まゆみは文句を言った。

「……そ、そう」

　そんなまゆみの様子に、絵里の眠気も一気に吹き飛ぶ。ちょっと怖い。

「まゆみおねぇちゃん、どうしたの？」

　まゆみの声が聞こえたのか、奥から凛が姿を現す。こちらは絵里と違って、ちゃんと服に着替えていた。まゆみの様子に、少し怖がっているような顔をしていた。

「あ……おはよう、凛ちゃん。ごめんね、なんでもない」

そんな凛の様子に気づいたのか、慌ててまゆみは笑顔を作る。頭に来ているのは勇気に対してなので、この二人に当たるのは筋違いだったと、まゆみは反省した。

「あ、そうだ。まゆみおねぇちゃん、ごめんね」

　まゆみが慌てて作った笑顔に安心したのか、凛も笑顔で、そして少し申し訳なさそうにまゆみにそう言った。

「おにぃちゃん、あのこと忘れていたんでしょ？」

　凛がそう言った途端、まゆみは笑顔を強張らせる。そんなまゆみの様子に、凛は後ずさりした。

「さ、張り切って朝食を作りましょ！　凛ちゃん、何が食べたい？」

　まゆみは、そう言いながらキッチンへと向かう。どうやら、凛が昨日の勇気について触れたことに関しては、聞かなかったことにしたらしい。

「え……っと、じゃあ、パンと目玉焼きとウインナーで」

「絵里さんもそれでいい？」

「あ……はい」

二人はまゆみの勢いに少したじろぎながら、居間で朝食が出来るのを待った。

「そういえば、勇気は？」

　朝食を食べている最中、まゆみが絵里と凛にそう聞いてきた。先程まで「勇気の話はしないで」といった雰囲気を出していたのに、一体どうしたのだろうか。絵里と凛は、顔を見合わせる。

「え……っと、おにぃちゃんはまだ寝てる」

「はぁ？」

　凛が、申し訳なさそうにそう言った瞬間、まゆみがテーブルを思いっきり叩く。二人は体を強張らせる。

「あいつ、昨日私に『健康的な生活』について散々語ったくせに、実践できてないじゃない！」

　いきり立つまゆみ。そんな彼女の様子に、二人は何もできずにいた。

「ふん！　いいもんね！　あいつの分の朝食と昼食と夕食、作ってやんない！　起きてから後悔するといいわ！　ざまー見なさい！」

　頬を膨らませてそっぽを向いたまゆみに、絵里と凛は溜息をついた。

「まゆみちゃん、ごめん」

「まゆみおねぇちゃん、ごめんね」

「ふん！」

　勇気の代わりに謝った二人だったが、その声はまゆみには届いていないようだった。

「ぎゃははははははｗｗｗ」

　週明け、昼休みに、勇気は同僚と一緒に昼食をとっていた時のことだ。二人は新米刑事で、勇気と話しているのは、同僚の。そのふっくらとした見た目から通称『ブタ』と呼ばれている彼は、勝ち誇ったように高笑いをしていた。白米を口に含んだまま高笑いをしているので、勇気の顔がご飯粒まみれになっている。ちなみに、「ｗｗｗ」というのは、ネット用語だ。意味は「(笑」を略したもので、康介はよく日常会話でネット用語を使うのである。

「き……汚いな！　ご飯粒こっちに飛ばしてんじゃねーよ！」

　ご飯粒をティッシュで拭き取りながら、勇気が怒鳴る。

「つーかブタ！　ネット用語を日常会話で使うんじゃねーって、何回言わせりゃいいんだ？」

「し……失礼な！　少なくとも、顔文字は止めてあげただろう！　我慢したまえ！」

　康介の言うとおり、彼は最近、顔文字は使わなくなった。苦情が殺到したためだ。

「会話のテンポが悪いんだよ！　つーか、質問に答えろよ！」

　康介がここまで大笑いしていたのは、先週末の謎について、勇気が康介に相談を持ちかけたからだ。話は、勇気がまゆみに引っぱたかれたところである。

「俺、何かしたのか？」

　結局、あれからまゆみとは一言も口を聞いていない。ほとほと困り果てた勇気は、仕方なく康介に相談を持ちかけたのだが、彼の判断は間違っていたと言わざるを得ない。

「なるほど、いつもはまゆみさんの手作り弁当を食べている君が、今日はコンビニ弁当なのはそういうわけかｗｗｗ」

　ダサい丸縁メガネを不気味に光らせながら、康介は気持ちの悪い笑を浮かべる。

「おい、人の質問に答えろよ！」

「まぁ、答えてあげてもいいんだがねぇ、一つ条件がある」

「……なんだ？」

　思いっきり嫌そうな顔をして勇気はそう言ったが、康介はニヤニヤしながら言葉を続けた。

「僕とが復縁する手助けをする約束をしてくれたら、君がまゆみさんに引っぱたかれた理由を、ｋｗｓｋ教えてあげようｗｗｗ」

「うごっ……」

　奈津美というのは、康介の元カノだ。勇気も会ったことがある。少し気が強いが、容姿は恵まれている方だと勇気は記憶している。なぜあんな子が、康介と付き合っていたのだろうか。

勇気としては、正直なところ、そんな面倒なことには付き合いたくない。康介には悪いが、このままにしておいた方が、奈津美さんのためでもあると思う。だが、まゆみがなぜ怒っているのかを知りたいと思っているのも事実。

「わ……分かったよ」

　渋々、勇気は康介の要求を飲んだ。

「ふっ……それでこそ、勇気君だ。では、教えてしんぜよう。まずは、手帳をだし給えｗｗｗ」

「……分かったよ」

　上から目線の康介にイラっとしながら、勇気は手帳を取り出した。警察手帳ではなく、普通の手帳だ。

「映画を見に行った日付のところをだし給えｗｗｗ」

「出したけど？」

「何か書いていないか？　読み上げ給えｗｗｗ」

　溜息混じりに、勇気は書いてある文字を読み上げる。

「午後四時半に映画館前集合」

「他には？」

「いや、何も？」

　勇気がそう言った瞬間、康介がゴミを見るような目をした。なぜこんなやつに、こんな目で見られなければならないのか。そんな事を勇気は思う。

「マジで？」

「……なんだよ」

「勇気君。さすがの僕でも、ちょっと引いているんだけど。本当に書いてないのかい？　それとも、覚えていないのかい？」

「は？　何を？」

　そう言った瞬間、康介が溜息をついた。そして、いつになく真剣な目つきで、勇気の方を見る。

「勇気君、一つ忠告だ」

「……？」

「このままだとまゆみさん、他の男に取られるよ？」

「……別によくね？」

　勇気は首を傾げる。

「いいのかい？　あんな可愛らしい子、君は今後出会うことはないかもよ？」

「か……可愛らしい……かね」

　康介の発言に、さらに首を傾ける勇気。そんな彼を気にすることなく、突然康介は語り始めた。

「可愛いでしょ！　猫のような大きくて黒い目と、すっと通ったやや高めの鼻。そして、それらのパーツを収めている、やや色白な小顔。さらにその顔を際立たせる、黒くてちょっと長めなボブカットはところどころ少し跳ねており、頭のてっぺんから飛び出たアホ毛が全体を印象づけている。体型はややスレンダーだが、そこがまたいいっｗｗｗ」

「……」

　語りが長すぎて、途中から聞く気力がなくなった勇気は、仕事に戻る準備を始める。そんな彼の様子に気づいたのか、康介は呆れたような目を勇気に向けた。

「勇気君、人の話を聞いているのかね？」

　康介にそう聞かれ、勇気は正直に首を横に振る。

「すまん、途中から聞く気力が無くなった。あいつが怒っている理由も話してくれなさそうだし」

「ガーン！　し……仕方ない、本来なら自分で気づいて欲しいところだが、特別にヒントを与えよう」

「ダイレクトに答えを教えてくれ」

　勇気としては、出来ることなら、さっさとまゆみの機嫌を直しておきたかった。久しぶりにコンビニ弁当を食べて思ったことだが、まゆみの作った弁当の方が栄養価も高く、うまい。

「ＨＡＰＰＹ　Ｂ(ry」

「……は？」

「ＨＡＰＰＹ　Ｂ(ry」

　一瞬聞き間違いかと思って、勇気は聞き返したが、同じ答えが返ってくる。

「もしかして、『誕生日』って言いたいのか？」

「良くできましたｗｗｗ」

「俺に、『誕生日おめでとう』って言ってもらえなかったのに、腹立ててんのか？」

　正直、勇気はまゆみの誕生日なんて覚えていなかった。去年も一昨年もその前も、「誕生日おめでとう」の一言も言った覚えがない。なぜ今になって怒っているのだろうか、そう勇気は思った。

「僕は全てを知っているが、それも理由の一つだなｗｗｗ」

「理由の一つ？」

だが、勇気が答えを聞こうとした時、昼休みは終わってしまい、康介はニヤニヤしたまま、何も答えてくれなかった。

「……ぷっ、あはははははは！」

　次の日の昼休み。カフェテリアで、勇気は今度は同じ相談を、科捜研の、通称『ＴＯＵＪＩ』に持ちかけた。康介に大笑いされたところで、藤二も大笑いする。

「……何がおかしいんだよ！　こっちは大変なんだぜ？」

「で、康介君にはなんて言われたんだい？」

「ああ、あのブタには……」

　勇気は、昨日康介に言われたことを藤二に話す。そして、再び大笑いされた。

「いやぁ、若いねぇ」

「笑ってないで教えてくれ藤二。たかが誕生日くらいで、あんなに怒るかね？　他にも理由があるみたいなんだが」

「こらこら。僕の名前を呼ぶときは、ちゃんと『ＴＯＵＪＩ』って呼んでくれなきゃ」

「音的には同じなんだよ！　いいからさっさと教えろよ！」

「うーん、どうしようかな」

　わざとらしく悩み始める藤二。そんな彼の様子に、イライラしていた勇気は『切り札』をだすことにした。

「おいこら藤二。てめぇこの間の事件、誰のせいで始末書書くハメになったと思っているんだ？」

　この間の事件というのは、一ヶ月くらい前に起きた、この近くで露出魔が出た事件だ。計六人もの女性が被害にあい、勇気たちが犯人を捕まえた。そこまでは良かったのだが、勇気は藤二のせいで、道路を破壊してしまったのだ。

「ゆ……勇気君自身のせいじゃないかな！　スイッチを押したのは君だ！」

　そう言った藤二だが、顔は引きつっている。

「てめぇが押せっつったんじゃなかったっけ？」

　勇気は、藤二の胸ぐらを掴み、顔を近づける。そして、できるだけ笑顔で口を開いた。

「あれさぁ、正直に始末書に書いたら、お前ふざけてんのかって言われたんだけど？」

「そ……それについては、僕も一緒に説明したじゃないか！」

「説明はして当たり前なんだよ！　責任とれ！」

　勇気は、藤二の顔に唾をまき散らしながら怒鳴る。興奮する勇気を、藤二は手で制した。

「わ……分かった。教える、教えるから！」

「最初からそういえ」

　そう言って、勇気は手を話す。藤二はコホン、と咳を一つして、割と真面目な顔で勇気を見る。

「勇気君、子供の頃の事って覚えている？」

「……お前との付き合いは、中学からだったと思うが、そのあたりのことか？」

　そのあたりなら、勇気もある程度覚えている。だが、藤二は首を横に振った。

「幼稚園の頃の事なんだけど……」

「……はぁ？」

　そんな昔のこと、当然勇気は覚えていない。そもそも、幼稚園の頃に、勇気は藤二と出会ってすらいないのに、なぜ藤二が知っているのだろうか。だが、勇気のそんな疑問をよそに、藤二は語り始めた。

「丁度、まゆみさんの五歳の誕生日の頃だったかな。この近くの公園で、君達二人はある約束をした。覚えているかい？」

「……覚えている訳ないだろ」

そう言って、勇気は頭を抱える。「覚えていない」と言ったものの、この先の展開に予想がついたからだ。

「ジャングルジムの頂辺で、君はこう言ったそうだね。『大人になって、ちゃんとお金がもらえるようになったら、結婚しよう』と」

「……」

「それに対して、まゆみさんはこう答えたそうだ。『じゃあ、仕事を始めた一年後の私の誕生日に、プロポーズして』と」

「それが、先週だったと？」

「思い出した？」

　勇気は顔を上げ、そして頭を横に振った。

「知らん。つーか、なんでお前が知ってんの？」

　当然の疑問を、藤二にぶつける。すると、さっきまで真面目な顔をしていた藤二の顔が、突然少し曇った。過去を振り返るような遠い目をして、藤二は口を開く。

「実はさ、勇気君には悪いと思ったんだけど、僕中二の頃、まゆみさんに告白したんだよね」

「なっ……初耳だぞ！　お前ら、付き合っていたのか？」

「いや、振られちゃった。でも、今の話、その時に聞かされたんだよね」

「……そ、そうなのか？」

　つまりまゆみは、言った本人でさえ忘れているような約束を、ずっと覚えていたらしい。藤二は勇気の質問に頷いた。

「まぁ、幼稚園児の頃の記憶なんて、普通は覚えていないよね。だから、勇気君が今までこの事を忘れていたことに関して、僕は責めるつもりはないよ。でも、彼女はずっと覚えていた」

　そう言い終えた藤二は席を立つ。

「ちゃんと、話をした方がいいんじゃないかな？」

　藤二は友人の肩をポン、と叩いて、研究所の方へ帰っていった。

「ただいま」

　夕方、遅く帰って来たわけではなかったが、小さな声で勇気は自分の帰りを知らせる。藤二にああ言われてから、仕事が手につかない。勇気はあれからずっと、まゆみのことで悩んでいた。

　誰かが何かを言ったようだったが、勇気は無視して真っ直ぐ自分の部屋へと向かう。

「……はぁ」

　正直、勇気には自分の気持ちがよく分からなかった。藤二の言ったことを整理すると、どうやらまゆみは自分の事を好いているらしい。確かに、思い当たる節が無いわけではない。いくら幼馴染とはいえ、少し一緒にい過ぎたと思う。

「……俺は？」

　一緒にいて、勇気自身、まゆみに好意を持つような事があったかというと、そういうわけではないと思う。ただの口うるさい友人、そんな程度にしか思っていなかった。

「……でもなぁ」

　藤二にああ言われてから悩んだ結果、強い罪悪感を覚えたことも事実。

「……なんで？」

　まさか、幼稚園の頃に交わした約束を、今日まで覚えているとは思わなかった。だが、不思議と迷惑だと感じるところはない。

「好きなのか？」

　勇気がそう思った時、胸の奥がちくりと痛くなった。やがて、その痛みはだんだん強くなっていく。堪らず勇気は布団にダイブする。

「……俺は？」

　もしかしたら、とんでもない事をしてしまったのではないかという思いが、勇気を襲う。

「……あいつは？」

　ふとそう思い、勇気は部屋を出て、居間へと向かう。入ると、そこには絵里と凛がいた。

「あ、勇気、おかえり」

「おにぃちゃん、おかえり」

「あー、姉さん。あのさ、今日ってまゆみは来た？」

　凛は学校として、姉はニートなので、ずっと家にいたはずだ。パソコン画面の中の王子様に夢中になっていれば別として、まゆみが家に来ていれば分かるだろう。そう思った勇気は、絵里に尋ねた。勇気の質問に絵里は頷く。

「どんな様子だった？　いつもと変わりなかった？」

　勇気は絵里にそう聞く。なぜか、答えを聞くのが怖かった。

「いつも通りといえば、いつも通りだったと思う。でも」

　絵里も話すのが怖いのか、少し考えてから、ゆっくりと口を開く。

「少しだけ、寂しそうな目をしていたと思う。目が少し赤かったから、泣いていたように見えた……って、勇気？」

　絵里がそう言い終わったと同時に、勇気は家を飛び出していた。

「……はぁ」

　まゆみは溜息をついた。ここは、先日勇気と恋愛映画を見た映画館の前だ。平日なので、夕方でも人はほとんどいない。

「……仕方ないか」

　あの時は勇気の事をひっぱたいてしまったが、思えば勇気が約束を覚えていないのも無理はない。(それでも、誕生日くらいは覚えていて欲しかったが)あれは、自分の我儘だったように思える。それに、もう少し粘っても良かったとも思う。

「……でも」

　頭の中では分かっているが、どうしてもショックだった。目のあたりが、突然熱くなる。あの日から、ずっとこんな感じなのだ。

「……明日、謝ろう」

　まゆみがそう呟いたとき、突然、ポッケに入っている携帯電話が震えた。

「……？」

　携帯の画面に映った名前は、ここ最近ずっと口を聞いていない相手だった。

「……来た」

　勇気が公園のベンチに座っていると、向こうからまゆみがやって来るのが見えた。もう夕方なので、公園の中にも近くにも、人はいない。

「……よう」

　近くまで来たので、勇気は立ち上がり、手を挙げて声をかける。

「……ふん」

　まゆみはそっぽを向く。さっきは「謝ろう」と思っていたまゆみだったが、いざ本人を前にすると、どうしていいのか分からない。

「えっ……とだな」

　そんなまゆみの様子に冷や汗をかきながら、勇気はこれからどうしようかと悩んだ。思わず家を飛び出してきてしまったものの、ノープランだった。

「いや、そりゃ言い訳か……」

「……？」

　気持ちは、今まゆみの前に立った時に決まった。ずっと自分の気持ちに気づかなかった勇気だったが、いい加減、気づくべき時が来たのだろう。さっきまで感じていた、胸の中の痛みはもうない。あるのは、胸の中で高鳴る鼓動だけだった。

「まゆみ！」

　勇気はそう叫ぶと、地面に膝と手をつき、頭を地面に擦りつけた。

「ちょ……勇気？」

「ホントすみませんでした！」

「は……はぁ？」

　土下座は予想していなかったのか、まゆみは目を白黒とさせている。構わず、勇気は続けた。

「幼稚園児の頃の約束とはいえ、忘れていた俺が馬鹿でした！　許してください！」

「え……えぇ？」

　先日「許して欲しい時は、土下座で平謝り」と言った通り、勇気は心の底から申し訳ないという気持ちで謝っていた。

「ゆ……勇気、顔あげて」

　勇気の気持ちが通じたのか、まゆみは勇気に優しくそう言った。勇気は顔を上げる。だが、まゆみはまたそっぽを向いてしまった。

「ま……まゆみ？」

「勇気」

「……？」

「あのさ……その……本当に、思い出してくれたの？」

　そっぽを向いたまま、まゆみは勇気にそう聞く。沈みつつある夕日のせいなのか、まゆみの顔はほんのり赤かった。

「ああ」

　まゆみの質問に、立ち上がった勇気は頷き、そう言った。

「じゃ……じゃあさ」

　ここで初めて、まゆみは勇気に顔を向けた。上目遣いで見つめているせいなのか、それとも声が少し震え気味なせいなのか、勇気にはまゆみがいつもより少し小さく見えた。

「……き？」

「……ん？」

声が小さくて、聞こえない。

「私の……き？」

「……すまん、もう一度言ってくれ」

　またよく聞こえなかったので、勇気が聞き返すと、まゆみは恥ずかしそうに頬を膨らませた。

　その反応で、勇気は全てを理解する。

「私の事、好……！」

　はっきり聞こえるように大きな声を出したまゆみだったが、言葉は最後まで続かなかった。開いた口を、何かで塞がれたのだ。まゆみにはそれが、一瞬何なのか分からなかった。

「……！」

　数秒たって、まゆみはようやく、自分が抱きしめられ、自分の口が勇気の唇で塞がれていることに気がついた。

　その行為はたった数秒の出来事だったが、二人には随分長い時間、その行為をしていたように感じられた。勇気が目を瞑っていたので、まゆみもそれに倣って目を瞑る。

「ゆう……き？」

「えっと……これが俺の答えなんだけど……ダメか？」

　唇を離した二人の顔は、真っ赤だった。それは、夕日のせいだけではない。お互いに、それを理解した。ふいに、まゆみの目から熱い液体が流れ落ちる。

「ちょっ……まゆみ？」

「勇気の……勇気のバーカ！」

「ええっ……！　わ……悪ぃ！」

　慌てて謝る勇気だったが、動作を封じるかのように、今度はまゆみが勇気に抱きついた。勇気の体に顔をうずめているため、どんな顔で泣いているのか、勇気には見えなかった。だが、そんなまゆみの行動に安心した勇気は、抱きつくまゆみの頭を撫でる。

「ホントごめんな、まゆみ」

「ばぁか……勇気のばぁか……！」

「悪い悪い」

「待っていた……待っていたんだよ、ずっと、あの日から……。私も我儘だったなぁって……思っていたけど、やっぱり聞きたかった……」

　嗚咽混じりにそう言ったあと、まゆみは顔を上げて勇気を見つめた。泣いたせいか、目が赤い。だが、勇気は不思議と安心感を覚えた。

「まゆみ」

　勇気は、まゆみの肩に手を置いた。

「俺と、結婚してくれないか？」

　まゆみは答える代わりに、勇気の背中に回した腕に力を込めた。

「痛っ！　痛いって！」

「ねぇ、勇気」

　腕に力を込めたまま、まゆみが上目遣いで勇気を見つめた。

「もう一回……してもいい？」

「ったく、仕方ないな」

　勇気はまゆみの発言に少し笑って、再び二人は唇を近づけた。

　落ちる夕日が、二人を紅に彩っていた。これから始まる二人の愛を、祝福するかのように。

　後日。

「おいブタ、本当について行かなきゃダメか？」

　建物の前で、勇気は足を止めて、改めて康介の顔を見る。ここは、康介の元カノ、奈津美が勤めている会社の前だ。先日、まゆみが怒っている理由を教えてもらう代わりに、康介たちの復縁の手助けをする約束をしたからである。

「何を言っているんだね、勇気君。怖気づく気かい？」

鼻息を荒くしながら詰め寄る康介に、怯んだ勇気は本当の事を言うことにした。

「正直に言おう、その通りだ」

　なんとなく結果が見えているような気がしている勇気は、今すぐにでも帰りたかった。しかし、そんな勇気の気持ちも知らずにか、康介は勇気の腕を掴む。

「大丈夫だよ。君の役目は、奈津美をここまで呼んで来ることだけだ。僕じゃあ連絡つかないからね。そこから先は、誰の手を借りるつもりもないよ」

「そ……そうか」

　康介の波ならぬ覚悟を感じて、勇気も腹をくくった。

「じゃあ、行ってくる」

　深呼吸をして、勇気は建物の中に入る。受付の人に奈津美につなぐよう言うと、彼女はすぐに出てきた。

「ブタ、連れてきたぞ」

「何の用？」

　ある程度の事情は話しているので、少しは話がスムーズに進むかもしれないが、それでも奈津美は大夫不機嫌だった。そんな奈津美の様子に、康介は腰にすがりつく。

「許せ、奈津美！」

「ブ……ブタ！　ここでか？」

　周りには、人が大勢いた。そんな中での康介に、白い目を向ける人もいれば、クスクスと笑う人もいる。

「ママ、あそこに変な人がいる！」

「見ちゃダメよ」

　こんな声まで聞こえてくる始末だ。

「許して？　何を？」

　奈津美は、明らかに不機嫌だった。だが、ついには泣きだした康介は、口を開いた。

「『たまにはＭの気持ちにもなってみ給え』なんていって、悪かったぁ！　復縁してくれ、奈津美！」

「そんな理由で別れたの？」

　思わずツッコミを入れた勇気は、奈津美の方を見る。だが、不機嫌なままかと思いきや、そっぽは向いていたものの、少し照れているような表情をしていた。

「……仕方ないわね」

「いいのかい？」

「マジですか……」

　笑顔になった康介をみて、勇気は思わずそう呟いた。

「それじゃあ勇気君」

　急に奈津美に話しかけられた勇気は、思わず姿勢を正す。

「な、なんでしょう」

「棒と縄とライターを持ってきなさい」

「は、はい！」

　目が光った奈津美を見て、勇気は身震いをする。この人、ドＳだったらしい。

「おっかねぇ夜になりそうだな」

　勇気は、手放しで喜んでいる同僚に向かって、溜息をついた。

 　　　　　　　【あとがき】

　お久しぶりです。Puney　Loran　Seaponです。まさか、前作の続きっぽいものを書く事になるとは思いませんでした。楽しんで読んでいただければ、幸いです。後日談は、蛇足だったかもしれません。少し反省しています。

　そういえば、よく「○○は俺の嫁」という言葉を聞きます。私の主観では、友紀は歩の嫁、空は祐太の嫁、楓は真一の嫁、優香は拓馬の嫁、そしてまゆみは勇気の嫁だと思っています。当然異論は認めます。ちなみに私に嫁はいません。良いのか悪いのか。すいません、妄言です。気にしないでください。

　それでは、次回作でまた会いましょう。